
王妃様は逃亡中

遊森 謡子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王妃様は逃亡中

【Nコード】

N1247Y

【作者名】

遊森 謡子

【あらすじ】

『異世界から召喚された黒髪黒目の女性は、その国の王妃になり世継ぎを生みましたが、郷愁の思いに耐えかねて元の世界へ帰って行きました』。そんな筋書きになるはずだったんでしょねえこの状況。「あなたの役目は終わった、元の世界に帰れ」？ じゃあっだんじゃない、日本に帰るのなんかまっぴらごめん！ 強制送還回避のため城からの逃亡を余儀なくされたけれど、実は日本での経験から「逃亡慣れ」していた王妃。さてどうする？ 2011.9.9. に投稿した短編『王妃様は逃亡中』の長編版です。

プロローグ（前書き）

短編版『王妃様は逃亡中』、たくさんの方に読んでいただき、さらに続編リクエストいただきありがとうございました！ 長編版スタートです。あの短編の背景とその後を、ぜひお楽しみ頂ければと思います

プロローグ

たった二十数年生きてきただけの人生だけど、幸せなんて長くは続かないものであることを、私は身をもって知っていた。

まさかそれが日本でも異世界でも通用する法則だったなんて、知りたくもなかったけどね！

絶体絶命の状況で、私は目の前の男にガンを飛ばしながらそんなことを考えていた。

「王妃様、立派にお役目を果たされたこと、国民を代表してお礼申し上げます。心おきなく、元の世界にお帰り下さい」

目の前の男、祭司長のグレッドが恭しい手つきで、王妃　つま　りこの私　の後ろを指した。

背後の大理石の床には、魔法陣が紫色にぼんやりと光っているはずだ。さっき聖堂に入った瞬間に見たからね。

私が日本からこの世界に召還されてきたときの魔法陣とは、微妙に色が違うだけでよく似ている。それに気づいた時にはもう遅くて、数人の僧兵を従えたグレッドが聖堂の入口を封鎖していたのだ。

「世継ぎを生んだら、私は用なし？」

魔法陣を背にした私は、隙をうかがいながら言葉をぶつけた。

くっそお、こいつ初めて会ったときから、なんか企んでると思ってたのよ。日本での逃亡生活で磨いた直感を信じればよかった、あれから二年経ったとはいえ私もヤキが回ったわね。

「これはこれは……私は僭越ながら、王妃様のお悩みをお察ししたまでです。生まれ育った場所にお帰りになりたいでしょう？」

聖堂の、夜空を透かした水晶の天井に、グレッドの低い声が反響する。

じよおっだんじやない、もう日本なんかまっぴらごめん！

両親も健在、犯罪者でもない私が、なぜ日本脱出にそんなに喜んだのか。

それは、父が大物政治家で母は有名女優という生い立ちに原因がある。そう、私はいわゆる隠し子で、日本ではマスコミに追い回されていたのだ。

そんな中、この国ハーヴェステスに召還されて穏やかな生活を手に入れて、私がどれだけ喜んだと思ってるの？

「祭司長殿は私に、国王陛下と愛する王子を置き去りにして、帰れとおっしゃるの?」

馬鹿丁寧に尋ねる。

アレ、今「愛する」が「王子」にしかかかってなかったような。まあ細かいことはいつか。

「ご安心下さい、幼い王子様は私が後見して、立派な王太子にお育て申し上げます」

しゃあしゃあと言い放つグレットドは、紫の祭司服に銀の鳴杖めいじょうを手にしている。理知的な瞳が、意味ありげにこちらを見つめていた。

王子を操って、自分が実権を握るつもりね。ハッ、なんて分かりやすい悪役っぷりなの。それにしても、私が邪魔なだけなら何で殺さな……はっ！

「まさかこの陣に入ったとたんに私、死ぬとかじゃないでしょうね！ だいたい帰還の陣があるなんて、聞いたことないわ」

「それは王妃様が、帰る方法について一度もお聞きにならなかったからです」

ハイそーでしたー！

「でも、なんでこん」

「ご心配には及びません」

理由を聞こうとした私の言葉に、グレットはおっかぶせるように言った。

「王妃様は産後ウツのために、私に頼みこんで魔法陣を発動させ、元の世界にお帰りになる。お優しい陛下だ、そんな理由なら納得して下さるでしょう。後顧の憂いなくお発ち下さい、さあ」

僧兵たちとともに一步踏み込んできた、その準備万端のドヤ顔がム力つく。ピンヒールのかかどで踏みつけてやりたい、ていうかやる、いつか絶対やる！

私はそう決意しながら、さらりと言った。

「あらそう。それじゃあ、アレは何なのかしら？」

聖堂の入り口の方を指さすと、グレットはとっさにそちらを振り向いた。

その瞬間、私はくるりと魔法陣の方へ向き直ると、数歩の助走で一気に魔法陣を飛び越えた。

これでも学生時代は、幅跳びでインターハイ出場したんだからね！
「シーゼ様！」

グレットがあわてた声で、こっちでの私の名前を呼ぶのを背中であ聞きながら、祭壇の後ろに回り込む。指先が床のわずかな引っかかりを探し当て、私は隠し扉を引き開けると飛び降りて扉を施錠した。この王城の中の王族用逃走経路はとっくに確認済み！ 日本での逃亡生活をなめんなよ！

私は太股にベルトで巻いてあったジツポ（日本から持参した品の一つ。あ、こっち来てから禁煙したけど）に火をつけると、暗い石造りの通路を一気に駆け抜けた。えーっと、右・左・左・もっかい右っ。

突き当たりの壁に寄せて、用意しておいた大きなシヨルダーバッグが置いてある。その中からごく普通の綿シャツとスカートを引っ張り出して着替え、ポンチョみたいな外套を羽織ってフードをかぶ

った。

バッグを肩にひっかけると、頭上の上げ蓋を押し上げる。

そこは王城の裏手の森だった。この出口のことは、グレットは知らないはず。

黒々とした梢の隙間から夜空を見上げ、星に方角を尋ねて、私は走り出した。

くっそお、絶対に王妃の座に戻り咲いてやるから覚悟しとけ！

息子よ、ミルクは飲んでもグレットの言うことは鵜呑みにするな！

夫よ、あんたもだ！

……って、こっちの世界でも結局、逃亡生活か！

1 王妃召喚（前書き）

1話目と2話目は国王視点です。

1 王妃召喚

「妃が『帰った』？」

帰城早々、祭司長から内密の話があると知られて人払いした執務室。余は、平伏するグレットの言葉に思わず立ち上がった。

「余が城を空けている間に、何があったのだ」

「は……昨夜、王妃様が私の部屋へ、供もつけずにおいでになったのです」

グレットは、床に着けていた額を少しだけ浮かせて言った。

「そして、『やっぱり国母なんて無理。もう帰る。帰還の陣を開いて』とおっしゃりながら……短剣を首に」

「わが身を盾に、そちを脅したのか」

「いえ、短剣を私の首に」

であるうな。自分が死ぬより相手を殺す女だ、妃は。

「他にも、『ここにいたら二人目産む羽目になるかもしれないじゃない。あんな痛い一回だけでたくさん、もうヤダ』とおっしゃって」

うむ。確かに先日王子を出産する真つ最中に、「二人目なんか絶対産むもんかー！」という叫び声を城中に響き渡らせていた。

「しかし……にわかには信じられぬ。妃はニッポンには帰りたくない」と常々……」

逡巡する余に、グレットは再び額を床にすりつけた。

「他にも『世継ぎを産んだら私は用なし』とつぶやかれ……お心を病んでおられたのかもしれませんが。それに気づかなかったのは私の不覚」

その言葉に、余は一瞬言葉を失った。グレットは続ける。

「しかし、帰還の陣に入る直前には、陛下と王子殿下の今後を心配なさっておられました。申し訳ありません、お止めすることができず……」

余は執務機の椅子にもう一度深く腰掛けると、額を押さえた。

「……少し、一人で考えたい」

「は……」

グレットはゆっくりと立ち上がると、

「私は聖堂で謹慎しております。いかようにも御処分を……」
と言いつつ執務室を出て行った。

おかしい。何かがおかしい。妃らしくない気がするのだが……。
余は、妃と初めて出会った頃のことを思い返した。

たった二十数年生きてきただけの人生だが、人間しよせん打算で生きていくことを、余は身を持って知っていた。

それは、我がハーヴの地でも異世界ニッポンでも通用する法則であつたらしい。

余は、ハーヴェステス王国の当代国王である。

我が国の王室には、節目の代の国王が王妃を異世界から迎えると、その子孫が国を栄光に導く、というカビの生えた言い伝えがあつた。百二十代目の曾祖父が召喚を行つてから八十余年、次は百二十三代目の余が召喚を行うことになつていた。

異世界の女性を妻にするということは、この国の高貴な身分の女性を妻にしてその実家の後ろ盾を期待する、というようなことができなない。そのため、節目の代に国王の座に就くことを「はずれくじ

を引いた」などと揶揄する輩がいることも知っている。

しかし、実は余は、この召喚制度を心中密かに歓迎していた。年頃になったら召喚が行われると決まっていたために、余の周りでは正妃の座を巡つての争いが起こったことがないからだ。

側妃についても、正妃を召喚した後で選定するか否かを決定すると告知してあったため、水面下では色々あったやもしれないが、表立っては平穏なものだった。

余は、父親である先代国王の妃たちの、醜い争いを見て育った。実の母である第二側妃が早死にしたのも、その精神的な負荷のせいだと余は思っている。

年頃の女たちは「張り合いがない」「女を磨く気概が薄れる」「などと顔を合わせてはこぼしているようだが、余は父のように女たちの争いさえも利用して貴族どもの手綱を取る手腕も持たなかったし、誰か一人の女を愛して「妃は彼女でなくては嫌だ」などという波乱を巻き起こすような情熱家でもなかった。

後ろ盾を持たない妻を王妃として迎え、平凡な人生を送るという打算を実現できるなら、相手は異世界の人間でも全く構わなかった。ただ、故郷のすべてから切り離されて、この世界へやってくる女性の悲しみだけは心配であった。どんな女性でも、せめて何一つ不自由ない状態で出迎え、希望を聞いて労わってやらねばなるまい。

祭司長や近衛騎士団長、女官長らと準備を進めながら、余は淡々とその日を待った。

そして、吉日を選んでついに召喚が行われることとなった。

聖堂は、建物の半分が水晶で作られている。磨かれ透き通った天井を見上げると、夜の闇に少しずつ朝の色が混じり始めていた。そんな、世界の清冽さを感じられる時刻。

射し初めた朝の光が祭壇に届き、さらに空になお残る明けの明星の光を鳴杖に戴く呪を唱えたグレッドが、祭壇の前で杖を水平に伸ばしてゆっくりと回転した。

最後に立てた鳴杖で床を一つ突くと、シャン、という澄んだ音とともに夜明けの冴え渡った空気が振動して、魔方陣が渦を巻くように光りながら開いた。

余は自ら指先に傷をつけると、陣の中へ手を差し出した。

ひとしずくの血が陣の中に落ちた瞬間、魔方陣が強い光を放った。

光が収まったとき、召喚陣の中央に、余と同じ年頃の女性が立っていた。

化粧気のない顔はしかし整っていて、黒い瞳が賢そうな光をたたえている。黒髪は無造作に後ろで一本にまとめられていたが、素早くあたりを見回したその動作で、腰までの長さがあるのがわかった。地味な服の頭巾を後ろに垂らし、ズボンを履いている。

もう一度こちらに向き直った彼女の固い視線に、余はようやく我に返った。

すぐに祭司長が、魔精霊であるイルフレートを飛ばした。薄く柔らかい羽が何枚もある、書のような蝶のような形のそれは、言葉の通じない他国人との交流の際に、通訳としての役目を果たす存在だ。一人の言葉の意味をもう一人の意識に働きかけて理解させる、文字通り『意思を疎通させる』能力を持っている。

彼女の髪の結び目あたりにふわりととまったイルフレートは、異世界人との間の意思も滞りなく疎通させてくれた。

「余はハーヴェステス国王、フェザリオン・ハーヴェス……」

余が説明し始めるのを遮って、彼女は「話は聞くから匿ってくれ」という。しつこい男につきまとわれている所だったそうで、もう追われることはないと言ってやると、いぶかしげにしていた。

聖堂の応接室に場所を移し、この国の召喚の伝統を説明する。

「えーと……まあそういうファンタジーを読んだことがないわけじゃないけど……」

彼女は視線を宙にさまよわせ、しばらく黙りこくってから、

「まあ、夢なら夢でもいいか。覚めるまでひたってれば」

と妙な納得の仕方をしていた。

一応話を進めることにして、余が国王であり百二十三代目であることをもう一度説明すると、彼女は片方の眉を上げて

「なにそのキリ番イベント」

とつぶやいてから、うなずいてこう言った。

「うん、でも、もし夢だとしてもすごくいい夢だわ。いいよ、王妃になる」

2 王である証拠は“城”？

私と祭司長のグレットド、そして近衛騎士団長と女官長は、顔を見合わせた。

そもそもこの四人しか儀式に立ち会わなかったのは、召喚された女性を取り乱すこと前提で、その様子をむやみにさらさないためだったのだが……この落ち着き様は。

「わかっておるのか？ 有り体に言えば、世継ぎを生めということだぞ？」

余が念を押すと、彼女は少し表情を緩め、もう一度どこかいとけない仕草でうなずいた。

「うん。私、その……ちょっとすさんだ生活を送ってたから、自分は結婚して子どもを生むなんて生活はできないと思ってたのよね。保護してもらえて、しかも普通の結婚生活を送れるなんて、嬉しいくらいよ」

国王との結婚を『普通』で済ませるか。

剛胆にもほどがある………いったいどんな生活を送っていたのだろう。

とにかく、彼女はその日眠っていないとのことだったので、一晩経ってから改めて気持ちを聞くことにして と言ってもすでに朝陽が昇っていたが 聖堂に付属する塔の客室を与えて休ませた。

夕刻、聖堂に適当な用事を作って、こちらから彼女の元へ出向いた。

国王自らが出向くのはあまりないことではあったが、彼女から余に王城に会いに来させると目立ってしまう。この世界の人間はみな、

髪の色は白かそれに順ずるごく淡い色、瞳は紫に属する系統の色。彼女のような黒髪黒目は存在しないのだ。

壮年の近衛騎士団長とともに客室に入ると、窓辺に立っていた彼女が振り向いた。服装は召喚時と同じ。着替えなかったのか？

少し憔悴した様子に、奇妙な話だが余は安堵した。彼女もやはり一介の女人、やっと今の自分の状況を悟って混乱しているに違いない。

「具合が悪そうだが、大丈夫なのか」

余が先に長椅子に腰かけると、部屋にいた女官長が彼女を向かいの椅子に促す。彼女はこちらに近づきながら、軽くため息をついた。「あまり眠れなくて。ここ、非常階段とか避難ハッチとかないわけ？ 逃走経路確保しないで眠るなんて無理だわ、私」

「ひなんはつち？」

イルフレートがおおよその意味を伝えてはきたが……バルコニーに、穴？

彼女は余の様子には構わず、向かいに腰かけると余をまっすぐ見つめた。

「さつきは混乱してて、簡単に王妃になるなんて言っちゃったけど、その前に聞きたいことがあります」

やはりな、と余は思った。

あんなに簡単に、余の妻になることを了承するはずがないのだ。まずは何を尋ねられるか……元の世界への帰り方か、それとももつとしたたかに、交換条件として何かを要求してくるか。

彼女は言った。

「あなたが王様だという証拠は？」

「……何？」

聞き返すと、彼女はごく真面目な口調で言った。

「口ではいくらでも言えるものね、自分は王様だなんて。証拠を見せて下さい、証拠を」

一瞬呆気にとられてしまったが、それも確かにもっとも……か。

「そう、だな……王家の人間には、肩の後ろに十字のアザが」

「だから、それを見せられたところでアザが本物かどうかもわからないし、そもそも王家の人間にアザがあるって言うそれすら、余所からきた私には事実なのかわからない。王家の人間一列に並べて『ほら全員アザが』って言われても同じ」

「無礼な……！」

思わずと言った風に近衛騎士団長が口を挟んだが、彼女はちらりとそちらへ流し目を送った。

「だって、お互い困るでしょ。もしも王様の偽物が現れて、『余が本物の王様である、ほらアザもある、余の妻になれ』って言われて、私がそれ信じてそいつの子ども妊娠しちゃったらどうするのよ。お家騒動もいいところじゃないの」

団長が詰まるところを、余は初めて見た。

「まあ、窓からの景色を見る限り、さすがにここが王城なんだろうって言うのは信じます。さすがすぎるもん、ここの建物群。あとは、あなたよ」

確かに、余は凡庸ゆえ、一目で王と分かるほどの威厳をまとうているとは思わないが……人間より建物を先に信じるか。

「どっしりと？」

興味深く思つて尋ねると、

「ここが王城であるという前提でだけど、きっと王族専用の隠し通路とかあるんじゃない？ それをあなたが知っていて、教えてくれたら、信じられるわ」

彼女は挑戦的に余を見た。

「私が王族の一員になるなら、教えてもかまわないでしょ？」

聖堂に連れて行き、祭壇の裏の隠し通路を教えると、彼女はようやく納得したようだった。

「本当に王様なのね。じゃ、よろしくお願いします」

彼女はその時になってやっと表情を和らげ、初めて笑顔を見せた。この女性は、美しい妃になるだろう、と思った。

しかし同時に、余は少し ほんの少しだが、落胆していた。先代国王の妃の座を争っていた、女たちのことが頭をよぎる。

結局、彼女も、余が国王だからこそ、保護と引き換えにこうして打算で結婚するのか。

こちらが一方的に召喚したにも関わらず、余は勝手に夢を見ていたのかもしれない。

余のためだけに召喚され、余だけを見てくれる女性を。

椅子を回し、窓の外を眺めた。彼女が一目で城と信じた、いくつもの尖塔を抱えた白い王城、それに付属する建物や庭園が、どこまでも広がる。

そう、余と妃は、本当の意味で心が通い合っていたわけではなかったのだ。

彼女が余に一言の相談もなく帰ってしまったのだとしても、責められるものではない。

「シーゼ……」

余は、彼女のこちらでの名を、静かにつぶやいた。

3 王妃様の黒歴史

はー、情けないけど何だか懐かしいよ、この逃亡生活。

私はせつせとオールで舟を漕いでいた。

城を脱出した後、いったん城下街に出た私は、貸し馬屋のおっさんを叩き起こして馬を一頭借りるという目立つ行動を取った。そして馬のお尻をひっぱたいて街道に放し（ごめん）、逃げたように見せかけておいてから、川に出て小舟で城を離れたのだ。

即座に多方面に追手がかかるようなことはないだろうと踏んでの行動だったけど、当たり前だったかな？ だって王妃が元の世界に帰ったって見せかけたいなら、あまり大騒ぎにはできないもんね。犯罪者を追いかけるのはわけが違う。

いやーしかし、王妃が手こぎボート漕いで逃げてるなんて、きつと誰も思わないだろうな！。

そう……二年前に日本からハーヴェステス王国に召還されたときも、私はやっぱり逃亡している真っ最中だったのよね。

私は日本での生活を思い返した。

生まれてすぐに母方の祖母に預けられた私は、両親は死んだものと思いこんで育った。ところが十六の年、祖母がこの世を去る時にとんでもない出生の秘密を言い遺したのだ。

私の父は大物政治家で、母は有名女優。私は、隠し子なのだ。

自分は両親の若いころの過ちでできて、そして捨てられた子だったのだ。それは、思春期の少女には重すぎる事実だった。

祖母の死後、寂しさも相まって私は非行に走った。煙草に酒は当たり前前、男女問わずに知り合いの家を転々とし、夜の街をフラフラしては補導される。

当の両親はどうしてるかって？ 毎日テレビで見かけてたから、生きてるのは知ってたけどね。

「ああ、今日も元気に汚職ってるな」「ああ、今度はお色気系の新境地開拓したのねオメデトウ」って、まあそんな感じ？

もしも今、自分が子どもだと名乗り出ても、父は党首選の真っ最中で足の引っ張り合いに利用されるだけだろうし、母は若いころのスキャンダルなんか封印したいに決まってる。

はいはい、もう勝手にやってちょうだい。むしろ表舞台から姿を消すような何かをやらかしてくれないかな、そうすれば私みたいな隠し子なんか、世間的にどうでもよくなるし。

そんな風に荒んでいた私が、かろうじて犯罪にだけは手を出さなかったのは、祖母の「親はどうあれ、あんたは何も悪くないんだから、自分を貶めちゃいけないよ」という遺言が胸にあったからだ。

おばあちゃん、大好きだったおばあちゃん。

でもね、一つ突っ込ませてもらうなら、私が静かな人生を送れるようにって『静子』って名前をつけてくれたけど、そりゃ無理だわ！

ある日、夜の街で酔い潰れた私は警察に保護された。その時に優しく諭してくれた警察官にほだされ、私は涙ながらに自分の素性をしゃべってしまった。

そしてその警察官は、うっかりだかわざとだか知らないけれど、雑誌記者に私のプライバシーを漏らしゃがった、らしい。

翌朝警察署を出たところで、記者につかまりそうになったから。

警察官でさえ信用できなくなった私は、もうグレてる場合ではなくなつた。このまま身を落としたところをフラデーされて黒歴史

が暴露されたら、私みたいな小娘一人、簡単に社会的に抹殺されちゃうじゃないの。

高校だけは友人の助けもあったけど、卒業したけれど、それは同時に私のギリギリな逃亡生活の幕開けでもあった。

名を変え仕事を転々として、数年の月日が流れた。

ある日の明け方、私は疲れた身体を引きずってアパートへの道を歩いていた。その頃は深夜のオニギリ工場で働いていたので、帰りはいつもそんな時間。

何でこの仕事を選んだかって、世間の人と違う時間帯に行動できて、さらに食品関係は仕事中に帽子とマスク着用だから顔が隠せるじゃない？ 他人に顔の印象を残したくなかったのよね。

アパートが見えたあたりで、私はいつもの癖で、あたりにさっと目を走らせた。

そして、向かいの公園の植え込みに、首からカメラをぶら下げた人影があることに気づいた。

さりげなく一本手前の道を折れる。ちっ、とうとう家がバレたか。

こんな時間じゃ知り合いの家に転がり込むわけにも行かないし、ひとまず漫喫かファミレスにでも……と思いつながら、尾行を警戒して工事現場の中を突っ切ったのがまずかった。地下駐車場か何かのための空間を掘っていたのだろう、大きな穴の上に足場が組んであるだけの不安定な場所に踏み込んでしまったのだ。

いきなり足下がぐらりと傾いだと思ったら、奇妙な浮遊感があった。

次の瞬間には、いきなり足が床についてずっこけそうになった。

ほらアレよ、ぼーっと階段を降りていて、てっきりもう一段ある

と思って足を降ろしたらもう床だったっていう、あの時みたいな感じ。

おっかしいな、もっと落ちそうな感じだったのに。

そこは天井のめっちゃくちゃ高いガラス張りの建物の中で、私は薄暗い中、ぼんやりとピンク色に光る不思議な文様の描かれた円の上に立っていた。

目の前には四人の人間がいて、そのうち三人は私を見た瞬間、一歩下がって恭しく頭を垂れた。

何だか全員、服装がおかしい。テーマパークの従業員みたい。

そして一人残った、一番立派な身なりだけど無表情な男が、ハッと我に返ったようにこう言ったのだ。

「あー……なんだったかな」

おい。

「ごほん……異世界からの花嫁よ、よくぞ我がハ」

「悪いけど、急いでるから簡潔に。あなた誰」

「……余はハーヴェステス国王、フェザリオン・ハーヴェス。そなたは余の花嫁となるべく、今この場に呼び寄せら」

「話、長くなりそうね。聞いてあげるから、ちよつと匿ってくれない？ こんな広々とした場所じゃまずいんだわ、私」

私はハラハラしながらあたりを見回した。建物がガラス張りじゃ丸見えじゃないの、あいつ追いかけて来てないでしょうね。

そう、私はまだ自分が工事現場付近にいると思っていたのだ。暗いし建物あるし空が見えてるし。

フェザなんとかという男は、女がうらやましがりそうな大きな瞳を瞬かせた。いまいち頼りにはならなさそうだけど、いい男の部類

には違いない。

「追われておるのか」

そう聞かれ、犯罪者だと思われたくなくて、私は当たらずといえども遠からずな理由を付けた。

「変な男につきまとわれててね」

「それなら、心配ない。そやつは追って来れぬ」

彼は、カツラなのか何なのか、白銀の髪をさらりと揺らして口の端を少し上げた。

「そなたは、別の世界に逃亡したのだからな」

正直、変なものに関わっちゃったな、と思った。

思い出に浸りながら機械的にオイルを漕いでいると、やがて朝陽が昇って朝もやが晴れ、前方の川べりに町が見えた。

さて、これからどうしよう。フェザリオン　フェザーは今、新しくできた港の開港式典に出るために海沿いの町に出張していて、今日城に戻るはずだ。帰ってくるをどこかでどうにか捕まえ、一緒に戻れば……。

うっん、悪いけどフェザーはあてにならない。実質、お城で一番偉いのは王太后様（つまり先代王妃ね）で、王様であるうちの夫ではないっていうあたりがすでに情けない。

そういえば、祭司長のグレットは王太后様のお気に入りなのよね…… 思い出したらまたムカついてきたので、それは置いて。

いくら王妃だとはいえ、私の立場なんか部屋の隅のホコリみたいなものだ。何で日本に強制送還されることになったのかわからないことには、城に戻ってもまたそのうち今回のように掃いて捨てられるだけだろう。今回のことを訴えてもグレットはどうせしらを切る

だろうし、また産後ウツだなんだって言われて病気扱いされたらたまったもんじゃない。

生まれたばかりの可愛い息子、ウィンガリオンを思い浮かべる。フェザーにそっくりだと思っただけで、フェザーは目つきが私にそっくりだと言っていた。時々睨まれるって。

息子に会えないのは辛いけど、王太后様が優秀な乳母をつけてくれたし、再会の時まであの子が大事にもらえるのは間違いないだろう。

親子の明るい未来のためにも、今は雌伏の時。まずは今後の対策を練らないとならないけど、私一人では心許ない。

こんな時に、たった二年前に異世界からやってきた私に、頼れる人なんかいるわけがないよ……。

……なーんて。いないこともないんだな！　これがな！

4 名誉の負傷

季節の変わり目になると、左の膝が痛む。

いつもの飲み屋の、いつもの席にどっかりと座り込み、俺は膝を伸ばしてさすりながらいつもの酒を注文した。

狭い店内の喧騒と人いきれの中、酔いが回つてくると脳裏に浮かぶのは、かつて仕えていた主　　ハーヴェステス国王妃、麗しきシーゼ様の黒い瞳。

怪我で退役した今でも、お守りしたいと願うのはシーゼ様ただ一人だ。

異世界から女性が召喚されたという発表があった翌日、俺はその女性専属の警護職に着くことになった。

たぶん、俺がそれほど職務に熱心でないから、選ばれたのだろう。

異世界人の女性は、世継ぎを生む大事な身体ではある。しかし、彼女はこの世界に降ってわいた、良い意味でも悪い意味でも唯一の存在。その身にさまざまな職務や因縁を背負う王太后や国王とは、警護の意味合いが違う。そういうことだ。

女性はまだ婚儀を上げていないため、王妃ではなく仮に「栄妃」と呼ばれている。国を栄えさせる存在という意味だろう。本来の名ももちろんあるのだろうが、何故なのか本人が言いたがらないと聞いた。

その栄妃の真新しい居間に、着任のあいさつに赴いた。黒髪黒目の栄妃は俺を見ると、新芽のような淡い緑のドレスの裾を気にしながら立ち上がった。着慣れないのだろう。

「御身をお守りさせていただく栄誉を賜りました、メイラー・セリ

クスと申します」

型通りの言葉を述べて膝をつき、騎士の礼を取って、王妃の手を額に戴く。ひんやりとした細い指。

反応がないので、そのままの姿勢で戸惑っていると、横から女官長が声をかけた。

「栄妃様。栄妃様？ ……固まっておいでだわ。栄妃様！」

それを聞いてうつかり顔を上げると、栄妃は頬を夜明けの雲のような薄紅色に染め、口をパクパクさせていた。

そして言った。

「王様や祭司長の上から目線より、ひざまずく騎士の下から目線って、破壊力デカっ！」

瞬間、周りの景色が消えて、彼女だけしか見えなくなった。

異世界に召喚されて堂々としているのに、このような小さなことで恥じらっている。強く、そして繊細な、この女性。

騎士になって初めて、『心からの忠誠』という言葉の意味を知ったその日から、俺は仕事にも訓練にも精を出すようになった。

彼女はとにかく色々と規格外な言動の女性なのだが、昨日のことのように思い出せる印象的な出来事が一つある。

婚儀も間近に迫ったその日は、王城に宝石商がやってきていた。

栄妃は国王とともに商人に会い、卓の黒い布の上に広げられた宝石類を眺めている。自ら、「自分の身を飾るものは自分で選びたい」とおっしゃったのだ。

普段あまり贅沢なことを好まれない妃なので、宝石を見たいとおっしゃった時は意外だった。今も、それほど目の前の輝きに熱中しているようには見えないのだが……。

「気に入ったものはあったか」

国王が隣の栄妃に声をかけ、商人が上品な微笑みを浮かべて、一

つの箱を差し出した。

「こちらはいかがでしょう。隣国から取り寄せた、大変珍しい一点ものの首飾りでございます。女性の頂点に立たれる方でいらっしゃる栄妃様に、ふさわしいかと存じます」

俺もちらりと目を走らせた。

あの馬鹿馬鹿しいほどでかいのが宝石か。ふん、芋か卵の間違いじゃないのか。

しかし彼女は、その首飾りに関しては何も言わず、ちよつと首をかしげてこう尋ねた。

「あなたはこの後、城の他の女性たち向けにも商いをするんでしょう？」

かっぶくのいい商人は、目を瞬かせた。

「はい。午後に、応接室の一室をお借りして、店を開かせていただくことになっております」

「侍女や女官や、街の女性たちは、どんな宝飾品をつけるの？ 良かったら、見せてもらえないかしら」

なぜそのようなことを尋ねるのか、その場の人間はみな思ったことだろうが、商人は快く傍らの箱を引き寄せて卓の上に載せた。

開くと、細い銀の鎖に小さな宝石が三つ、等間隔で揺れている首飾りがいくつか入っていた。

「こちらはかなり以前から、街の女性に人気ですね。この国で多く産出される石ですので、本物でありながら値段もそう張りません」

「ふーん……なら私、これが欲しいな」

国王と商人が、同時に栄妃を見る。俺もつい、そちらへ目を走らせた。洒落た首飾りではあるが、とても彼女の胸元を飾るにふさわしいとは思えない。

栄妃は、星の瞬く夜空のような瞳で国王を見つめてから、ふと眼を伏せた。

「さっきの一点物も素敵だったけど、何だか寂しくて」

「寂しい？」

「私は異世界から来た人間……皆さんは優しく私を受け入れてくれたけど、黒髪黒目の女は一人だけ。そんな私が、一つしかない宝飾品をつけても、寂しさが増すだけのよくな気がして……。できれば、この国の大勢の女性たちと同じものを身につけて、少しでもこの国の一員になったような気持ちを味わえたらな、って」

俺はぐつと下唇を噛んだ。

なんと……なんと健気なお方なのだ！

商人も思わず目を潤ませている。

「栄妃様……そのようなお気持ちでいらしたとは」

「けれど恐れながら、やはりお召しものとの兼ね合いもございませし」

侍女が口を挟む。もっともな意見かもしれないが、少しは空気を読め。

国王がわずかに栄妃の方に身体の向きを変えながら、商人に言った。

「それで寂しさが和らぐのなら、余は妃の意見を尊重してやりたいと思うが……その方の意見はどうか」

「は」

商人は少し考え、

「それでは、お望みのこの首飾りを、いくつか重ねてつけた形に見えるものをお造りするのはいかがでしょうか。それなら、国の女性たちと同じものをつけられるのと同時に、お召しものと比較しても見劣りしないものをご用意できると存じます」

栄妃は嬉しそうに、国王と商人の顔を見比べた。

「そうしてもらえたら嬉しいな」

「なら、そうするがよい」

「ありがとう！」

この逸話はたちまち知れ渡り、男性からは同情を、女性からは親近感と呼んだ。さらに国王との仲睦まじさも表す結果となり、栄妃の人気はいやがおうにも高まったのだ。

そんな女性をお守りできることが、俺は誇らしくてならなかった。

しかしまさかこんなにも早く、俺がその役目を手放さなくてはならない日が来るとは……。

あれは、婚儀が行われて栄妃が名実ともに「王妃」となり、その御身にお子を宿して体調が安定した、そんな頃。

城下町の劇場での観劇にお供したとき、異世界から召喚された者を悪魔だと狂信的に信じ込んだ男が、給仕を装い貴賓席に侵入した。

俺は、王妃に刃物で襲いかかった男ともみ合いになった末、男とともに貴賓席から階下の客席へ転落。王妃の悲鳴が意識の彼方へ遠のく中、足のすさまじい痛みとともに気絶した。

その時以来、俺は左足を少し引きずって歩かなくてはならなかった。膝の痛みは、その時に王妃を守ったという誇らしき勲章。

しかし、後遺症が残った足では、主を万全の状態でお守りすることはできない。俺は断腸の思いで、故郷へ帰って予備役につくことを受け入れた。

5 女王じゃなくて王妃だから

役目を退く報告で王妃の居間を訪れたとき、王妃は俺の手を取って泣いて下さった。その涙は、どんな宝石よりも、どんな星よりも、美しく俺の心に残った。

「いつか、あなたの故郷に遊びに、じゃなかった、視察か何かで行ってみたい。その時はきつと会いましょうね」

泣き笑いの顔の王妃に、俺は涙をこらえて頭を垂れた。

「この足がきつかけで王妃様をお招きできるなら、故郷の者は皆、私の負傷を名誉に思うことでしょう。その時は、この足でもお役に立てるところをお見せしとございます」

「ええ。あなたは私の一番の騎士だもの、きつとまた私を助けてくれるわね」

顔を上げたとき、俺は確かに後光を見た。

王妃は、俺の女神。

その時の言葉を励みに、故郷の警備隊の顧問のような仕事をして日々を送った。足は朝晩や疲れた時に痛むくらいで、杖も必要ない程度の症状だったから、この程度の仕事など軽くこなせると思っていた。

しかし、かつての仕事との大小の差が目につき、喪失感が心の奥にだんだん重く居座るようになり。

いつしか、酒の量が増えていた。不良騎士に逆戻りか……。

閉店時間になって仕方なく店を出ると、ゆっくり歩いて自宅に向かう。石畳の道はすでに暗闇に沈み、人通りもほとんどない。

この街は俺の故郷だが、俺は実家には戻らず、職場に近い平屋の

一戸建てに住んでいた。扉の鍵を回して開けたところで、後ろから鈴の鳴るような声で話しかけられた。

「メイラー？」

振り向くと、若い女が立っていた。頭にかぶった手巾の下から、白い髪のお下げが胸元に垂れている。瞳は暗くてよく見えないが、かなり濃い色。

そしてその顔は、俺の心の女神にそっくりだった。

「シーゼさま……」

俺はややるれつの回らない声でつぶやくと、そつと女の手を取った。女はされるがままで、にこりと微笑んで言った。

「中に入れてくれる？」

その時の俺は、感情を取り違えていたとしか言いようがない。敬愛する王妃。彼女のそばにいたいという、狂おしいほどの気持ち。そんな彼女にそっくりの女が、家に入れてくれと言う。

俺は女の手を引くと、抱き寄せながら家の中に引つ張り込んだ。

「うわ、あれ？ ま、待ちなさいよコラ」

唇を奪おうとすると、女は顔を振って避け、ついでにぺしつと俺の額を叩いた。

「私はこういう展開もアリだけど、そつち的にまずいんじゃないのコレ。私はあなたの主人でしょうが」

「いいね、そういう女王様系の設定……あんた俺の好みだな」

ささやきながら、壁に押しつける。首筋を吸いながら、手を性急に動かして服の隙間から素肌を探す。

「ちょ……ま、まあ、女王様プレイ好きなら私なんかおあつらえ向きかもね……って、女王と王妃って何か違うない？」

「細かいことはいいだろ？」

もつれるように敷物の上に倒れ込む。
その拍子に、白いものが跳ねとんだ。

敷物の上に落ちたのは、女が頭にかぶっていた手巾と、それにくっついた白い三つ編み……つけ毛？

そして布の下から現れたのは、つややかな黒髪だった。

俺は彼女の上から反射的にとびすさると、壁際まで下がって平伏した。

「申し訳ございませんっ！！！！ いかようにも御処分を！」

王妃は肘をついて上半身を起こし　なぜ王妃がここに！？

俺を見て肩をすくめた。

「もう終わり？　ちえー、ちよつときめいちゃったのに」

「その気！？」

「なんかいい雰囲気だったから、こうなったらイタシカタないって
いうか、イタすしかないっていうか」

「なりません王妃様！」

「声大きいよっ。シーゼって呼んでいいから！」

「そ、そんな、恐れ多い……！」

「気に入ってる名前だから、そっちで呼んでよ。フェザーにこの名前もらった時は、シートとガーゼ足したみたいに変な名前だなあと
思ったけど、今は愛着わいてるのよね」

へ、陛下……ご存知でしたかこの感想。

イルフレートが伝えてきた意味を受け、俺の脳裏で白い布がヒラヒラとはためいた。

「と言うわけで、私は城から逃亡せざるを得なかったってわけ」

簡素な机でパンとチーズを喜んで召し上がっているシーゼ様に、俺は質問させていただく。

「王ひ……シーゼ様、ここまでどうやっておいでになったのです」
王城からここまででは、移動し続けて一日半はかかる。

「小舟と、貸し馬。あ、地図はだいたい頭に入ってる」

「代金は？」

「少しは持ってたし、足りなくなったらこれがあるし」

シーゼ様は肩かけ鞆を引き寄せると、中から首飾りを取り出した。あの、俺が彼女を守りたいと強烈に思うきっかけとなった首飾りだ。しかし、石が一つ二つなくなっている。

シーゼ様は口の中のものを読み込んで、機嫌良く言った。

「一点物より、庶民的なものの方が換金しやすいと思ったんだけど、正解だったわ。足つかないしね」

俺の中で何かが、ガラガラと音を立てて崩れ落ちて行った。

「……し、しかし、まさかグレット様がそんな」

「私はあつたことをそのまま言っただけよ」

重くため息をつくシーゼ様に、俺はあわてて言う。

「いえ、疑ったわけでは。驚いただけです。とにかくそういうことでしたら、むさ苦しいところですがひとまずこの家にご滞在下さい。数日中に、もつとくつろげる場所をご用意いたしますので。後のことはおいおい」

すると、シーゼ様は弱弱しく微笑んだ。

「ありがとう……良かった、メイラーが城の外にいてくれて」

ついさっき崩れたものが急速に修復され、俺は舞い上がった。

シーゼ様が、俺を頼りにして下さっている！

表情筋がニヤニヤ笑いの形に反応するのを必死に押さえ込んでピクピクさせながら、俺はシーゼ様の椅子のそばで左膝をついて（ちよっと痛い）頭を垂れた。

「もったいなきお言葉。しかし、この足でお役に立てますかどうか」「必要なのは兵力じゃないから……」

その言葉に、思わず目頭が熱くなる。こんな俺でも、シーゼ様のお役に立てることがあるらしい。

俺はパツと顔を上げてそのお手を取ろうとして……動きを止めた。

シーゼ様は、机に突っ伏しておやすみになっていた。

あ、弱弱しく見えたのは眠かったからか……って、え？ 俺の目の前で？ 安心？ 無防備？ って主を机で眠らせるとかどうなんだ？ 俺の寝台へ？ ややや役得っ……！？

俺は細心の注意を払ってシーゼ様を抱き上げた。ひ、膝に来る……が、俺の胸元に顔が寄せられて長いまつげが……柔らかくて良い香りが……。

そつと寝台に降ろすと毛布をかけ、俺は家の外に飛び出すと、街の共用井戸で冷たい水を汲んで頭にぶっかけたのだった。

5 女王じゃなくて王妃だから（後書き）

明日は王城から中継で、国王陛下に結婚前後の思い出を語って頂く予定です。それでは今夜はこの辺で。

6 長き黒髪の花嫁（前書き）

お気に入り登録1111件突破ありがとうございます！

6 長き黒髪の花嫁

シーゼが『帰った』と聞かされた、その日の夜。

余はたった一人、寝台に起き上がって足を降ろしたまま窓から外を眺めていた。眠れなかったのだ。

この寝台は、こんなに広がっただろうか。結婚して以来、ここにシーゼがいなかった夜などほとんどないからな……。

思えば、シーゼは最初からそういうことに積極的だった。王妃になるのを承諾したと思ったら、もうその日に

「じゃ、今夜フェザーの部屋に行くわ」

と言い出して、侍女たちの度肝を抜いた。

寝室を共にするのは結婚式を挙げてからでよい、と言うと、

「えー、だって世継ぎを生むために呼ばれたんだから、式なんか待ってないでさっさと仕込みを開始してもいいじゃない」

と言い放って、侍女たちの魂も抜いた。

こちらの世界の貞操観念も考えてくれ、と言ったら

「こりゃ失礼」

とようやく引き下がってくれたが 何を焦っているのか。

そしてそれがきつかけだったのか、彼女はこちらの世界のことを学んでこちらの人間らしく、そして王妃らしく振る舞うことを心がけ始めた。

と言っても、彼女がやらなくてはならないことはそう多くない。

こういつては何だが、異世界からの王妃は世継ぎ以外の役割は大して期待されていないのが実情だ。彼女もそれは、王妃教育の中で徐々に感じ取っていったらしい。

「えーと、フェザーには悪いんだけど、このお城で一番偉いのって、王太后様なの？」

午後のお茶の時間に二人きりになった時、聞きにくい（はずの）ことをスパッと聞いて来た。

まあ、事実なので隠すこともない。余は説明した。

「王太后のレイザ様は、先代の父王とともにこの国の発展に偉大な貢献をなさった人物だ。夫婦と言うより、戦友だった。余よりも明らかに格が上だ」

「ふーん。……フェザーは何だか、王様業がつまらなさそうね。嫌なの？」

「嫌ではないが、他に適した人間が身近にいるわけだからな。余でなくてもいいのだ、という思いはある。国王失格かな」

苦笑すると、彼女はまたもやスパッと言った。

「失格なんて思うことないよ、王家に生まれたのはフェザーが選んだわけじゃないんだから。あなたは何も悪くないでしょ」

「いや……この国では、子どもは親を選んで生まれてくると言われておるのだ」

そう言うと、彼女は少し顔をしかめた。

「そうなの？」

「そうだ。だから、この場所に生まれた意味を見つけなくては、と両親からよく言われたものだ」

余は、故人である父王と実の母である第二側妃を想い浮かべた。

厳しかったが、優しい両親だった。

彼女は少し沈黙してから、こう言った。

「ふうん……。いいわね、親にそうやって励ましてもらえたら。私の生まれにも意味があるのかな？ あんな両親の間に生まれた意味が？」

「……………」
余はこの時にはもう、彼女が著名な両親の元に生まれた隠し子で

あることだけは聞いていたが、詳しいことは聞きかねていた。どれだけ不自由な暮らしを強いられていたのか。

しかし彼女は、旺盛な食欲で茶菓子をつまみながら、さらっと言った。

「まあ少なくとも私は、あなたがこの国の王様で良かったわよ」

初めて出会ったころよりも、ずいぶん表情が柔らかくなった彼女を見て、余は思った。

彼女が余との結婚を喜んで今ここで微笑んでいる、そのことが両親がきつかけだと言うなら、彼らに感謝してもいいのかもしれないと。

召喚から二ヶ月後、結婚式と王妃のお披露目は滞りなく行われた。

王城の謁見の間で、余の手から妃の頭に華奢な王妃冠を載せる。

顔を上げた妃の手を引いて壇上に促すと、妃はすらりと余の隣に立って祝福する人々の方を向いてみせた。

もともと整った顔をしているとは思っていたが、化粧をした妃は歴代の王妃に引けを取らぬほど美しかった。初めはドレスの着こなしにも苦労していたようなのに、今ではすっかり堂に入ったものだ。身についた、というよりも、それらしく見せる演技が上手いのだ。

白地に金系の刺繍の入ったドレスは腰の切り替えがなく、彼女の身体に沿っていて、女性らしい腰の線を際立たせながら足元に向けて広がっている。

そして黒髪はわざと目立つように、耳のあたりに少し生花とイルフレイトをつけているだけで、後は背中に流れ落ちるままにしてあった。異世界人の象徴である色を目立たせるための、祭司長の指示だ。その髪も、侍女たちの苦勞の賜物か、美しく艶やかに光っている。

髪を見つめていたのに気づいたのか、彼女は拍手を送って来る人

々の方を向いて微笑んだまま、余だけに聞こえるように言った。

「髪を伸ばしてたのが、こんなところで重要になるとは思ってたなかつたわ、さすがに」

「何か意味があつて、伸ばしていたのか？」

余も人々の方を向いたまま尋ねると、彼女は答えた。

「うん。いざ逃げるって時にバツサリ切れれば、印象が変わって見づかりにくいと思つて」

また逃亡の話か、と余が苦笑したのに気づいて、彼女は言った。

「ああごめん、ただ、いつでも逃げられる状態しておかないと落ち着かないからそうしてただけ。身に沁みついちゃってね。もう逃げたりしないよ」

「そう願いたいものだな」

まさか新郎新婦がこんな会話を交わしているなどとは、誰も思わないであろう。

余は内心ため息をつきながら、彼女と腕を組んで大広間へと移動した。

7 後朝の贈り物 (前書き)

お気に入り登録1234件突破、総合評価3333ポイント突破ありがとうございます！(作品にちなんで数字にこだわってみた(笑))

7 後朝の贈り物

祝宴が始まると、招待客が次々と我々夫婦の元にあいさつに訪れた。しかし、若い女たちは明らかに妃を値踏みしており、余に自分を印象付けておこうという言動が鼻につく。もし余と妃が不仲になつたら側妃に……ということだろうか。

妃はわかっているのかいないのか、終始微笑みを絶やさなかった。たくましい女だ。

その夜、夫婦の寝室となつた部屋で、王妃となつた彼女は寝台に腰かけて余を待っていた。

彼女はごく普通の夜着姿で、少々警戒していた余は内心胸をなでおろす。こちらは未だに、妃との距離感を測りかねていたからだ。しかし彼女は上目遣いで一言、

「『疲れただろうから今日は休め』とか言わないよね……？」
と先手を打ってきた。

む……強引に迫って来られるよりも、この迫り方は逆に惹きつけられるような……。

「そうは言わないが……全身全霊で取り組まなくとも、子どもはできる時ができる、そういうものではないのか？ 何をそんなに急いでおるのだ」

彼女の隣に腰かけながら、気になっていたことを聞いてみると、妃は言った。

「だって、心配なの。本当に子どもができるかどうか」

ああ、そうか……と余は彼女の気持ちを想像した。

子どもができなければ自分の居場所がなくなる、そう思っているのだろうか？

しかし彼女は、心配そうにこう続けた。

「海外旅行に行くと、日本の電化製品が電圧の違いで使えなかったりするんだって。異世界人同士の私とあなただって、そういうアレで妊娠しにくいとかあるかもしれないでしょ、変圧器があるわけじゃないんだしさ。うわ、プラグ突っ込んだと勝手に故障して使いものにならなくなったらどうしよう」

ぶらぐ、つつこむ？

イルフレートが伝えたあいまいな意味を、余はかるうじて咀嚼し飲み込んだ。ある意味、本当に妃を理解しようと思ったら、イルフレートでは追いつかぬ。

「……………そなたの考え方が独特なのはよくわかった。しかし、過去に召喚された王妃はみな、無事に子を授かっておる」

「ならいいけど」

さらりと答えた彼女は、少し沈黙した後で言った。

「ねえ……例えば王妃が、この城から逃げ出さなきゃならないようなことって、あるのかな？」

余は一瞬、言葉を失った。

逃げる可能性を考えることが身にしみついていると言っていたが、彼女は結婚式を挙げた今も、余や周りの人間、それに現在の生活自体を信じていないのだ。召喚されたばかりの頃の、人間より城を先に信じた彼女を思い出す。

お互い必要性があつての結婚だが、余と彼女は心の中に、人間を信じられないという似た部分を持っているのだ。

そんな男女が身を寄せ合う　意外と、似合いの夫婦なのかもしれないぬ。

「……………そのような不吉なことを申すな」

余は苦笑しながら、彼女の髪を軽く撫でた。早く彼女には安心してほしい、と思った。

「不吉？」

「王妃が逃げるのは、他国から攻められてこの城が陥ちる時くらいであろう？」

妃は肩をすくめた。

「それもそうか」

わずかな沈黙。

余の瞳をじつと見つめていた妃が、唇を寄せて来た。軽く触れ合う。

妃はいったん顔を離して、微笑んだ。

「こっちつて、結婚式に誓いのキスはしないのね。何だか、やっと！　って感じ……」

それからもう一度、今度は深く。さらにもう一度。腕を回すと、女性らしい曲線を持った身体がだんだん熱を帯びて、余の体温とまじりあって行くのがわかる。

「そなたの名前は、結局教えてはくれぬのか」

耳元でささやくと、

「隠すつもりはないんだけどね。本当は、シズコって言うの」
彼女も耳元でささやき返してきた。

「でも私、向こうでも本当の名前は名乗らないで、自分で勝手につけた名前を使ってたんだ。時々変えたりもしてたし。今はもうあなたが私の夫なんだし、こっちでの名前はあなたがつけてくれない？」

妃に、余が名前を……。

二人の距離が、一気に縮まった気がした。直接肌と肌を触れ合わせながら寝台に横たわると、先ほど妃の言った「やっと」という感

覚が、余の中にもようやく湧きあがってきた。

「……そなたをもう少し知ってから、名前を考えることにしよう」
言つと、妃は濡れた瞳でこちらを見上げてくすくすと笑った。

「じゃあ、私をじっくり教えてあげなくちゃね」

翌朝、余は妃に「シーゼ」という名前を贈った。「シズコ」という発音から思いついたのだ。

「『シーゼ』……？」

妃はかなりいぶかしげな表情をしている。ああ、きっと、イルフレイトが翻訳できなかったのだらう。

「古い言葉で『家』とか『居場所』という意味だ。そなたはここで居場所を得たのだから、と思つてな」

説明してやると、彼女は驚いた顔になった。

「……今まで、いい人にも何人か出会えて、私が見つかりそうになると『早く逃げる』って助けてくれたの。でも、『ここがお前の居場所だ』って言ってもらったのは、初めてだわ」

そして、余の首に手を回して抱きついて来た。

「ありがとう、嬉しい……んっ」

「ん。い、いや、さすがにそろそろ寢室を出なくては」

「だーもーっ、ここは盛り上がる場所でしょうが!？」

そうだ。居場所を得て、喜んでいただけではないか。それなのに、「帰った」……？

余は腕を組んで考え込んだ。そして、小さな疑問点に行き当たった。

彼女が帰るために必要だった、帰還の陣。それを、祭司長はどのようにして開いたのだろうか。

魔方阵を開くには、相当量の魔力が必要なはずだが、現在それを
用意することは可能だったのか……？

7 後朝の贈り物 (後書き)

次話はこの世界の魔法について。王妃視点なのでざっくりいい加減にいつもの調子で語られると思います。

8 この世界の魔法

私は、夢を見ていた。

お城で生活を始めてしばらく経って、フェザーと結婚して、ようやく私にもこれは現実なんだということがじわじわと実感できてきた、そんな頃の夢だ。

ある日、私はフェザーとの夕食の真っ最中に、いきなりフォークを取り落として叫んでしまった。

「魔法!？」

「ぐほっ……どうした、急に」

むせるフェザーに、私は椅子から腰を浮かして言った。

「いや、今さらで悪いんだけど、異世界から人間を召喚できるってことは魔法があるってこと!？ この世界には!」

普段の生活には魔法の気配が全然ないもんだから、すっかり忘れてたよ!

「本当に今さらだな……一応、魔法はある」

フェザーは口元を拭きながらうなずいた。そのテンションの低さにこっちも少し興奮をおさめながら、聞き返す。

「なに、『一応』って」

「建国時は魔法大国の名をほしいままにしていたが、長の年月の間に血が薄れたのか、ほかの要因があるのか、とにかく現在では魔法は弱体化しているのだ」

「でも、召喚なんてすごいことができてるじゃないの。それにイルフレートだって」

いろいろ問いつめてみたところ、今ではこの世界の魔法っていうのは、例えて言うなら「スプーンなんて手で曲げられるじゃん」みたいなレベルなんだそうだ。ちょっとがっかり。

そして召喚魔法は、例えて言うなら「虫眼鏡で日光集めてまで目玉焼き作らなくても」みたいな、時間も手間もかかるかなり無理矢理感のあるシロモノなんだそうだ。

「九十九代目の国王妃を召喚した翌年に、もう百代目の国王妃を召喚しなくてはならなかった時など、過労で倒れる魔法官が続出したと聞く……」

痛ましげにつぶやくフェザーに、

「だからキリ番とかゾロ目にこだわるのやめようよ」

つつこむ私。まあ、じゃなきゃ、百二十三代っていう“連番国王妃”の私は召喚してもらえなかったわけだけど。

「とにかく、魔法官っていう職業の人がいるのね？」

「ああ。魔法の研究と保存、それに召喚などの技のため、魔力の蓄積などを行っている者たちだ」

「面白そう、会ってみたい！」

というわけでその翌日、私は魔法庁と呼ばれる場所に遊びに、じやなかつた、視察に行った。

研究所みたいな場所なのかと思ってたら、意外にもそこはガラス張りの温室だった。私が召喚された時に出現した聖堂、あれもガラス張りだったな、と思っていたら、大理石でできた大聖堂を挟んで東側に召喚された時の聖堂（小聖堂）、西側に魔法庁、というつくりになっていて、それらの建物は続きになっていたのだ。ていうか、私ガラスガラス言ってるけど、本当は水晶みたいな貴重な石らしい。さーせん。

魔法庁の水晶の建物は、中央に天井を突き抜けて大きな木がそびえ立っていて、その木の根元に置かれた一枚板の大きなテーブルで、何人かの魔法官が仕事をしていた。書類仕事をしてる人もいれば、理科の実験みたいにフラスコみたいなものをあれこれしている人もいる。私はそこを、魔法庁の長官に案内してもらった。

長官は、少しクリーム色がかった長い白髪をアップにした、四十年代前半くらいの女性。政治家みたいにきりりとした雰囲気で、私は一瞬テレビで見た自分の父親を連想して、ちよっぴり苦手意識を持つてしまった。いかんいかん。

「魔法の力は自然界から少しずつ生まれていて、それを世界中からこの場所に集めています。この建物は、力を吸収しやすいように考えられて作られているのです」

長官は、魔法のない世界からきた私にもわかるようにかみ砕いて説明してくれた。そして、

「ここが、魔力を蓄えておく場所です」と見せてくれたのが、建物中央にそびえる木の洞うらだった。洞の中には、ぱつと見て砂時計の形をしたガラス（あ、水晶か）の大きな入れ物がはまりこんでいて、その中で何かがキラキラ漂いながら光っている。

「ここに溜まった力を使って、召喚は行われたのですよ」

「へえ……何だか綺麗。イルフレートも、この力を使って作られたんですか？」

私の髪に、髪飾りの一部のようにしてとまっているイルフレートを指さして聞くと、長官は赤紫色の瞳を細めながら答えてくれた。

「あれは少し違います。遺跡などから、古代の強い魔法が保存された状態で発見されることがあるのです。それと現在の技術を結びつけて、イルフレートなどの魔精霊を作り出しています」

「へええー。じゃあ、イルフレートってずいぶん希少な存在なんで

すね」

私は感心してお礼を言った。

「私のために使わせてくれて、ありがとうございます」
すると長官は、艶のあるほほえみを浮かべて言った。

「そんな、恐れ多い。王妃様を召喚する際は、予定していたより少ない魔力で召喚することができましたので、私どもこそお礼申し上げます」

「そうなんですか？」

「こちらから引く力に、抵抗感があまりなかったと……むしろこちらに来ようとする力を感じたと、祭司長が」

ハハハハハ。笑つとけ。

私はいきなり覚醒すると、寝台の上に取り上がった。

一瞬自分がどこにいるのかわからなかったけど、朝陽の差し込む殺風景な木造の部屋を見てすぐに思い出した。そう、退役した近衛騎士のメイラーの家にいるんだった。

もう一度、長官に説明してもらったことを思い出しながら考える。私を召喚するために、まあ少なく済んだとはいえかなりの魔力を使ったわけよね。それなのに、残りの魔力で帰還の陣も開くことができたの？ 帰りたがっていない私を無理矢理帰すには、それくらいじゃ無理なんじゃ？ やっぱりあれば、帰還の陣じゃなかったんじゃないだろうか。

いやいや、でも召喚から二年経ってるんだから、それなりの魔力は溜まっている……？

ダメだ、私は専門家じゃないからわからない。

「お目覚めですか、シーゼ様。ゆっくりお休みになれましたか」

気がついたら、メイラーが寝台のそばで膝をついていた。壁際の床に毛布が一枚置いてある……あそこで寝てくれたのかな。でも今はすでに動ける準備万端という感じで、さすがは元騎士だと思う。

「おはよう、メイラー」

私は寝台から足を降ろして、彼に向かい合ってから尋ねた。

「ねえ、あなたはまだ私の騎士？」

「もちろんです。この忠誠、揺らいだことなどございません」

「良かった。それじゃ、会いに行きたい人ができたから、付き合っ
て欲しいんだけど」

「は？」

魔法にある程度詳しい人で、今会いに行ける人といったら、一人しか思いつかない。

私は枕元に置いてあった、白いつけ毛を手にとって言った。

「これをくれた人。この髪の毛の、元の持ち主に会いに行きたいの」
メイラーは言った。

「人毛!？」

あ、なんか今ちよっと引かれたかも。

9 魔法官の見習い

ハーヴェステス王国に召喚されてから、乗馬の練習はかなりまじめにやったので、妊娠するまでの数ヶ月でかなり乗りこなせるようになった。だってやっぱりこちらの主な移動手段だからね、何かあった時に必要になるでしょ……って本当にそうなっちゃって残念だけど。

私はメイラーと轡くわを並べて、馬を駆け足で走らせていた。このスピードならどうにか話ができる。街から街へと向かう道はレンガが敷かれて整備されていて、馬車がすれ違える程度の広さもあり走りやすかった。

「このつけ毛は、アユルの髪で作ったの。アユルって覚えてる？」
つけ毛つきの手巾をかぶった私が聞くと、メイラーはやや長めの髪をなびかせながら 彼の髪はほんのりオレンジ色がかった白だ返事をした。

「覚えてます、有名でしたから。魔法庁で働いていた、魔法官見習いの少年ですよね」

「あ、やっぱり有名だったんだ、あの子」

私がメイラーに視線をやると、彼は何とも言えない表情をした。

「俺が言うのも何ですが、綺麗な少年でしたからね。侍女たちの噂の的でした」

「私も初めて会った時は、女の子と間違えたんだ」

私はその時のことを思い出した。

私が魔法に興味を示したので、魔法庁の長官が何日かに一度、王妃教育の一環でちょっとした講義をしてくれることになった。でも

さすがに長官さんだけあって基本的に忙しい人で、突発的な仕事で遅れることもあるし、来られないこともある。

それで長官が気を遣ってくれて、
「私より話しやすいこともありますでしょうし」

と、そういう時の話し相手に助手をよこしてくれることになった。
魔法官見習いとして修業中の子なんだって。

十二、三歳くらいはその助手の子に初めて会ったとき、私はびっくりして声をかけるのも忘れてしまった。だって、まるで宗教画に出てくる天使みたいに綺麗な子なんだもん！

こちらの人はみんな白っぽい色の髪をしているけど、その子はほのかに青みがあった白。綺麗にウェーブして、お尻の下あたりまで艶やかに流れ落ちている。瞳はアメジストみたいな透き通った紫で、ぱっちり二重に天然のアイシャドウ。透けそうに白い肌はうっすらとピンクに染まり、ふっくらした唇は珊瑚色。

魔法庁の制服のシンプルな白のローブも似合ってるけど、ぜひともドレスアップしてほしい。あつ、め、メイド服なんかもイ、イイかも、って息荒くして怪しいわ私。

「あ、ごめん、つい見とれちゃって。よろしく願いしますね」

あわててあいさつすると、その子は本当に天使のように神秘的な微笑みを浮かべ、膝を軽く曲げた。

「アユルと申します。ハーヴの民に繁栄をもたらすお方のお役に立てるなんて、とても光栄です。何でもお申しつけください」

あれ、高いけど意外にもハスキーな声。地声なのかな？

「もしかして、風邪引いてる？ 無理しないでね」

そう言ってみると、アユルは困ったように微笑んだ。

「お耳汚しで申し訳ありません、声変わりの途中で」

え？ おやまあ。

「えっと、きつと言われ過ぎてうんざりかもしれないけど、アユル

って男の子なの？」

「はい」

アユルはやはり慣れてきているのか、軽くうなずいた。

私はすぐにアユルと仲良くなった。彼も長官のお許しを得て、ちよくちよく顔を出してくれるようになった。

アユルとは、長官の講義の時よりもずっとくだけた雰囲気話ができる。テラスでお茶しながらのこともあるし、庭を歩きながらのこともあった。

「アユルもそうだけど、魔法庁に勤務してる人たちって、みんな見事な長い髪をしてるよね」

聞いてみると、

「長い髪は、魔力を受け止めやすいんです。そうして受け止めた魔力を、魔法官が体内でゆつくりと練って、魔法庁の聖樹の器に蓄えていくんです」

と説明してくれた。

聖樹の器って、あの木の洞にはまってた砂時計みたいなやつか。

「それって、誰でもできることじゃないんですよ」

「あ……素質のあるなしはあるみたいです」

控えめに応えるアユルに、私は感心して言った。

「アユルは有望株ってことね。素質がないと、髪を伸ばしても何も変わらないの？」

「本人が意識できないだけで、力は宿っていると考えられていますね。だから、何か願い事のある人はよく髪を長く伸ばしていますよ、一般の人でも」

「ふーん。それにしても、本当に綺麗な髪」

アユルの髪を褒めると、彼は素直な笑顔を浮かべて言った。

「王妃様の髪の方が、ずっと綺麗です」

彼はどうやら本気でそう思ってくれているようで、少し頬を紅潮させて私の黒髪をじっと見つめている。

そしてストレートに言った。
「あの、触ってもいいですか」

……うーん、それはたぶん、まずいんじゃない？ かつての私なら全然構わないけど、一応今の私は王妃様で、それなりの対応を求められる立場なんだよね。あ、ほら、侍女がたしなめるような目でこっちを見てる。

「えっと、アユル」

私が言いかけると、彼は自分で気づいたらしかった。ハツとして一歩下がり、頭を下げた。

「も、申し訳ありませんっ。僕、すぐ思ってることをしゃべっちゃって……いつも長官にも注意されているのに」

はは、じゃあいつもこんなこと言っちゃうんだ。そのうち天然の女たらしになったりして。

「ううん、いいのいいの。あ、そうそう、他にも聞きたいことがあってね」

私はすぐに話題を変えたのだけど……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1247y/>

王妃様は逃亡中

2011年11月9日23時05分発行